

物語の水脈～竜たちが会おうとき

偶然だろうか。都市の真ん中で竜たちが出会った。

3月にわたしたちは、沖縄の宮古島や多良間島から友人達を招き、原宿でイベント「風船トーク・碧く湿った息を吹き込む、そうっと、都市に眠る竜を目覚めさせるために」を開催した。宮古島の乙女達による美しい琉球舞踊や島人たちの笑顔からこぼれ落ちる言葉に、今はコンクリートに覆われ都市の地下に眠る竜も、そうっと髭を動かしたかもしれない。その時、私が紹介した沖縄学の父といわれる伊波普猷の言葉がある。「深く掘れ、己が胸中の泉。余所頼よて水を汲まぬごとに」この言葉に触発されたゲスト達と共に、生き生きとしたトークを楽しく展開することができた。

翌週には、同じ原宿で今度は秋田県の若者達が主催するトークショーに招かれプレゼンとコーディネーターをつとめた。一緒にプレゼンをしたのは、秋田の老農として知られる石川理紀之助の直系の子孫にあたる石川紀行さんだ。石川さんは八郎潟流域の谷津田再生について紹介した。この時に、彼の口から発せられた理紀之助翁の言葉に、私は一瞬はっとした。「井戸を掘るなら、水の出るまで掘れ」

理紀之助翁はある講演で、「濁りの無い澄み切った水が出るまで掘れという意味だ」と言っている。北と南の全く異なる土地に生きたふたりの言葉が、都市に眠る竜「地下水脈」を通して、私の中で出会い、繋がり、動き出した（竜動化した）瞬間だった。

実は、原宿は私にとって縁のある場所だ。私は自分の中のもやもやと格闘していた十代の大半をこの周辺で過ごしていた。しかし、その当時自分が立っていたアスファルトの下に地下水脈（谷津地形・竜）が眠っていたことには、全く気付かなかった。そして、自分のもやもやの中に眠っていた竜のことも。

それから何十年も経って、私はこうして再びこの地に足を運ぶようになった。霞ヶ浦流域で子ども達と取り組んだ谷津田（里山の竜）を活かすまちづくり学習を通して、私は都市に眠る谷津田の存在にようやく気付くことができたのだ。長い遍歴を経て、私は再び十代を過ごした街に帰って来た。私の中に棲む竜と共に、都市に眠る竜を目覚めさせるために。

「物語とは、物が語りはじめることだ」「それには君たちが魔法をかける必要があるんだ」と、小中学校での授業で、わたしは生徒達によく話す。自分たちの土地に眠る繋がりを見つけ出し、それらの繋がりを通して様々な物を読み直していくと、普段は暮らしの中で当たり前にあって何とも思わなかった物から新しい意味や価値が浮上し、それらの物から発した力で地域の人々が動き出す。そんな物語の水脈を探す学習を霞ヶ浦をはじめ八郎潟、渡良瀬川、宮川、紫川、賀茂川、隅田川、江戸川、宮古島、多良間島、沖縄島などの各地で、たくさん子ども達と行って来た。そして、ようやく自分がかつてその中に居た原宿に眠る竜（渋谷川水系の谷津田）に辿り着くことができた。

人は風土によって養われ、物語を糧に育つ。ところが、私が全国各地の小学校に行くと毎回驚くことがある。子ども達や先生達が自分の土地の草木や生き物や民話についてほとんど知らないことだ。周りの大人たちも大抵こう言う。「こんな何も無い所へよく来たね。」

自分が育つ土地のことを何も学ばず、土地の物語を語れず、全国共通の学力だけ身につけて育っていく子ども達が、いつか故郷を出て行った時に、果たして戻って来るだろうか。人は其処に、地下水脈があることも知らずに、何処へ、何を求めて行くのだろうか。

先に紹介した伊波普猷の言葉は、ニーチェの次の言葉を自らの言葉に置き換えたも

のだった。「きみの立つところを深く掘れ、そこに泉がある。」
それは、きみが行くどこまでも続く地下水脈になるだろう。

2012年3月30日

息を吹き込んでみよう、そうっと

そうっと、
息を吹き込んでみよう
そうっと、
碧く光る湿った息が
都市に眠る竜にとどくように

息を吹き込んでみよう
ほっぺをふくらませて
海の息を風船に思い切りいっぱい

息を吹き込んでみよう
言葉を繋ぐ鎖がとけるように
揺らしてみよう衝動の小舟にのせて

息を吹き込んでみよう
リーフの波紋が珊瑚に映るように
都市をおおう震えるリゾームになって

息を吹き込んでみよう
目覚めた竜がひげを動かすように
そうっと

(風船トーク in 原宿 2012. 3. 18)

ミツバチはささやく「わたしの壁は溶ける」

わたしは、都市の片隅でひそかに壁をつくる。
ビルの谷間に咲く小さな花をさがし求めるために
わたしは壁の中で生まれた。
でも、わたしの壁は溶ける。
壁は溶けてかすかな虹になる。

わたしは、都市の片隅でひそかに壁をつくる。
季節に移ろう花々の証をとどめ置くために
わたしは見知らぬ花々を結びつける。
でも、わたしの壁は溶ける。

壁は溶けて灯をともす。

わたしは、都市の片隅でひそかに壁をつくる。
まちを読み替え、見知らぬ花と出会うために
わたしはふるえる、無数の羽音の中で
わたしの壁は溶けて音をうるおす。
壁が溶けて音楽を奏でる。

わたしは、都市の片隅でひそかに壁をつくる。
忘れられた竜をよびもどすために、唇に虹をかける。
わたしは蜜をつくる。虹のように甘い
わたしの壁の中では虹色の竜が育つ。
壁は溶けて空に竜を描く。

わたしは、都市の片隅でひそかに壁をつくる。
でも、わたしの壁は溶ける。
震えるわたしの言葉の中で
壁は溶けて
色とりどりの光る膜にかわり
風船になる。

(風船トーク i n 原宿 2011.6.11)